

日本食チートのない異
世界ご飯

NiOさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本人転生勇者『なろ主』と、異世界奴隷『奴隷ちゃん』の日常グルメ小説です。

『外国人の日本食へ対するリアルな反応』と『自分が成人後始めて日本食を食べたらどう思うかの妄想』をベースに、『異世界での日本食に対するリアルな反応』を書いてみました。

異世界の人は、『卵ごはん』も『おにぎり』も『寿司』も『味噌汁』も、多分好きじゃない人の方が多いです。

日本食マンセーにうんざりした人向けの小説。

目次

たまごごはん。	1
おにぎり。	6
すし。	10
みそしる。	15

たまぐしはん。

私が勇者様……なる主に出会ったのは、静かな雨の降る日のことでした。

その頃の私は、奴隷商さんからまともな食事も与えられていませんでした。

すっかり弱っている私を見て、奴隷商さんは『牢屋の中で死なれては迷惑だ』と呟いて。

そんなこんなで、私は森の奥に連れていかれることになりました。

外はしとしとと雨が降っていて、私は何となく『ああ、これなら静かに死ねそうだなあ』と考えたことを覚えています。

ちようど、その時です。

「……その奴隷、どうするの？」

半死半生でヨタヨタ歩いていた私を指差して、少年が奴隷商さんに尋ねました。

不思議な少年でした。

大陸ではまず見ることもない黒い髪に、どこまでも深い黒い瞳。

奴隷商さんは私を捨てに行くところであることを少年に告げて、彼のような若い冒険者が払えそうなギリギリの値段を吹っ掛けました。

少年は歯を食いしばり俯いて。

小さな声で、呟きました。

「……………このお金は……………とても大事なもので……………でも……………見過ごせない……………」

そして、ボロボロの財布を取り出すと。

奴隷商さんに財布ごと、渡したのです。

……………これが私のご主人様、なる主との出会いです。

私はこの時に誓いました。

例え疎まれようとも、嫌われようとも。

奴隷契約がなくなろうとも。

一生この人に、ついていくつて。

#####

「誓った私が、バカでした〜!!」

なる主と出会って数ヶ月が経ち。

私は何度同じ言葉を絶叫したことでしよう。

絶望する私の目の前には、世にも恐ろしいゲテモノ料理がありました。

味のない野菜である『はくまい』の上に生卵を乗せて『しょうゆ』と言う調味料をか

けたとか言う、禍禍しい料理。

自分でも顔が青ざめるのがわかります。

なる主はどうやら、辺境の村『ニホン』出身で。

劇的にクソ不味い『ニホン料理』を、至高の料理と勘違いしているみたいなのです。

「これが日本料理の『卵ごはん』。

通称、完全食、だよ」

「生卵を、料理に、使うな〜!!」

あまりの酷さに、思わず敬語も忘れて抗議します。

「卵を生で食べたたらお腹を壊す、子供でも知ってますよ!」

「いやでも、ちゃんと除菌魔法かけたから……」

「気持ちの問題です!」

なる主は菌がないからってカエルの卵を生で食べられます!?

生理的にムリですよね!」

「え、それは無理だけど、いいから食べてみてよ」

「嫌です、イヤですううう〜!!」

「ほら、いいから、騙されたと思って」

なる主の『騙されたと思って』が出ました。

これが出たら、食べざるを得ません。

……今まで騙されなかったことってないのですが。

「う……ううう……！」

えらい、ままよ!! (パクツ)

「……どう？」

おいしいでしょ？」

「クソ不味い！」

生卵の鼻水みたいな食感が、先入観を打ち消すことなく前面に出ている！

これに味のない『はくまい』と、やたら味の濃い『しようゆ』が合わさることで！

三者三様の、それぞれの悪いところを余すところなく表現しきっています！

掛け値なしに、これは、クソ不味いです!!」

「え、ウソ」

「ホントウですー！」

シユンとするなる主を横目に、私は『たまごごはん』を胃の中に無理矢理流し込みます。

……こんなクソ不味い料理でも、なる主の好きな味であり、なる主が私のために作ってくれた料理だから。

そんな私を見て、なる主は『文句を言いつつも全部食べる素直じゃない奴隷ちゃん』と

か言ってます。

マジで何とかしてほしいです、この人。
というわけで。

これは私こと、『奴隷ちゃん』と。

最高で、最低の、ご主人様、『なる主』との。

どうでも良い日常の、ものがたり。

おにぎり。

勇者様であるなら主のお仕事は、もちろん魔王征伐なわけですが。

まだまだ力が足りないので、近隣を脅かす魔物を狩ることで経験値を貯めて、魔王城へ一歩ずつ進んでいくつもりなんだそうです。

なる主のレベルが低いと言うのは、ある意味チャンスです。

私もなる主をサポート出来るくらい、強くならなくちゃいけませんね！

というわけでここは『はじまりのむら』から数十キロ離れた草原のど真ん中。村を襲うゴブリンの住み処まではまだ道半ば、といったところでしょうか。

出来れば今日中に『やわらか森』の入り口まで進んでおきたいですね。

そんな私の考えを知ってか知らずか、なる主が声を掛けたのでした。

「ちよつと休憩しよう、奴隷ちゃん。

『腹が減っては戦はできぬ』っていうし」

『はらがへってはいくさはできぬ』

お腹が空いてたら戦えないと言う辺境の村『二ホン』のことわざだそうです。

このことわざ自体には激しく同意します。

激しく同意しますが……。

「出来たぞ奴隷ちゃん。」

日本料理の『お握り』だ！」

……やっぱりなる主、ニホン料理をぶっ込んできた……。

「な、なる主……なんですかコレ……石炭にしか見えませんが……？」

「見た目は悪いけど、これは海苔って言って、海草を加工したものなんだ。」

ほら、食べてみて」

「か、海草を加工したもの？」

海草って、海のごみですよね？」

『ニホン』ではそんな物食べるんですか!？」

海草なんて、食べても下痢するだけです。

『ニホン』は一体どれほど貧しい国なのでしょう……。

「陸の恵みの『ごはん』を、海の恵みの『海苔』で包んだ日本人のソウルフード、『お握り』。」

……良いから、騙されたと思って」

また出ました、『騙されたと思って』。

こちらの拒否する気持ちを根こそぎ奪う、魔法の呪文です。

「う……………うううう！」

えらい、ままよ!! (パクツ)

「……………ど、どうかな？」

「……………お、おええ！」

黒い紙が喉に貼り付いて気持ち悪い!

最初、一瞬だけ『パリッ』としているから騙されそうになるけど、その数秒後に海草に戻ってるじゃないですか!」

「え、あれ？」

「しかも、この、なかに入ってる赤い実、信じられないくらいしょっぱい!

な、なんですかコレ!」

「ああ、それは梅干しだよ。」

『梅はその日の難逃れ』と言って……………」

「はあああ!?! 梅!?! あの、木の実の、梅!?!」

「え、え。」

うん、そう、だけど」

なる主は何でもないことのように言っています。

梅の実には……………青酸配糖体という毒が入っています。

つまり、これは確実に……私を殺しに来ています。

「……わ、私を、ころすんですね？」

わ、私は……そんななる主を傷つけていたんですね？」

あまりの出来事に、涙が次から次にぼろぼろと溢れてきます。

確かに、『ニホン料理』に関してはボロクソに言っていました、だからって毒殺するく

らい憎まれていたなんて……。

「なら、申し訳ありませんけど、ここでお別れです……大丈夫、なる主はきつと立派な勇

者様になります……。

さよならッ！」

「な、なんで突然死のうとしてるの!？」

私が自身の喉元に突き付けた刃物を、なる主が驚いた顔で奪い取ります。

因みにこの誤解は、梅酒を飲むまでちゃんと解けることはありませんでした。

お握りも梅干しもクソ不味かったけど、梅酒は美味しかったです。

すし。

「よ、よくぞ私を倒したな、勇者よ。

しかしこの私、『海のシオカラライ』は四天王の中で最弱……四天王の面汚しよ……ガクツ」

旅を始めて一年が経ち。

なる主は遂に、四天王の一角を崩しました。

素晴らしい快挙です！

「はあつ、はあつ……なんとか倒したぞ！」

息を切らして仰向けに倒れ込むなる主。

本当に強くなりましたね。

自分のことのように嬉しいです。

「終止圧倒してましたね。

さすなろ！」

「いやいや、奴隷ちゃんも、本当に強くなったよ……ていうかその魔法、どこで覚えたの？」

「前の中ボスが使ったのを見よう見まねで……」

「て、天才か!？」

なる主が私を誉めてくれます。

嬉しくつて、ちよつとこしよばいけど、ここで満足してはいけません。

『かつてかぶとの おをしめよ』

なる主が言っていた辺境の村『ニホン』のことわざを思い出して、私は自分のほつぺたを両手で叩きました。

……痛いです。

私が一人でそんなことをしていると。

何を思ったのか、地面に倒れこんでいたなる主は、突然がばりと起き上がって。

「よし、今日は、お目出度い日本料理にしよう！」

ちようどココは海だし、魚を捕って、アレを作ろう！」

そんな言葉を発しました。

多分私を労ってくれているのだとは思いますが。

……どうせなら、ニホン料理以外が良いです。

#####

なる主が、生魚の切り身を丁寧に切り分け、『す』とか言う調味料で味付けされた『は

くまい』にくつつつけています。

くつつける部分に塗ってる緑色の物体は、ニカワみたいなものでしょうか？

なる主の一連の動作はまるで職人で、目の前でリズミカルに握られていく一口大の

『さかなとはくまい』は、見ている分にはとても綺麗でした。

あくまで、『見ている分には』、ですが。

「これは、寿司っていうんだ。

ほら、右から『サケ』『サバ』『アジ』『イカ』『タラ』だよ。

まだまだ、どんどん握るね」

聞いたことのない魚の名前を連呼するなる主ですが。

私にはそれが『アニサキス』『アニサキス』『アニサキス』『アニサキス』『アニサキス』
にしか見えません。

でも、少しだけ安心しました。

なる主なら、「フグの刺身だよ」とか言う可能性もありましたから。

……なあんて。

流石の『ニホン料理』でも、フグは食べないですよね。

「ご飯の上に、生のおさかな……ですか」

げっそりする私に、なる主は

いつもの言葉をかけます。

「まあまあ、だまされたと思って」

うんざりしながら、ふと目を移すと。

オレンジ色のプチプチとした宝石箱みたいな『すし』が目に入りました。

「あれ？」

「このまるいプチプチ、きれい……」

「ん、それはイクラの軍艦巻きだね」

生々しい『すし』の中で、一つだけメルヘンな物を見つけました。

よ、よろし。

「う……う……う……」

えらい、ままよ!! (パクツ)

口の中に広がる、磯の生臭さ。

プチプチと弾けた宝石からは、ねばねばした液体がどろどろと流れ出していきます。

思ったのと、全然違う味です。

もつと可愛い味を想像していた私がバカでした。

込み上げる胃酸ごと宝石箱を飲み込みます。

「お、おえく!!」

「何ですかこれ?」

「魚の卵だよー」

あまりにもあまりな発言に、それは、自然と出た言葉、でした。

「死ね! なる主死ね!!」

「死……!?!」

流石に酷い仕打ちだったので、私は『すし』を完全拒否しました。

なる主は、自分で握った二人分の『すし』を一人で食べて苦しそうにしていますが、自業自得です。

……ちよつと可哀想なこと、しましたかね?

……いえいえ、たまにはコレくらいやらないと!

あ、でも、卵焼きの『すし』は美味しかったです。

みそしる。

「よくぞ我を倒した！」

だがいずれ、第2、第3の魔王が現れるだろう！

まあ、私の『毒爪』を食らった貴様には、そもそも未来が無いのだがな……ガクツ！」
旅を始めて二年。

なる主はどうとう、魔王様を打倒したのでした！

……だけど。

ああ、だけどだけどだけど！

「なる主、大丈夫ですか!?!」

「……」

なる主が無言でまくり上げた服の向こうには。

紫色に変色するお腹の傷が、ありました……。

「……え、え?」

「『魔王の毒爪』……食らったら、ハイフリエステス『女教皇』でも治せない、確殺の攻撃だ」

傷口から、血がじわじわと滲んでいます。

量は多くないものの、全く止まる様子を見せません。

「そ、そんな！

なろ主!!」

なろ主は力なく地面にへたりこむと、私に優しい目を向けました。

「奴隷ちゃん……最期に、君の作った味噌汁が、飲みたいなあ……」

「そ、そんな……何をいつてるんですか。

て、転移魔法で王都へ戻りましょう!

きつと傷を治す方法が見つかるはず……」

なろ主は、力なく首を振ります。

もう全てを、諦めているかのように。

「ムリだ。

自分の体のことは、自分が一番よくわかる。

僕の寿命は、あと数時間だ」

「な、な、ろ、主、く!」

私は泣きながらなろ主に抱きつきます。

まだ、こんなに温かいのに。

こうしてお話ができるのも、あと、数時間だけ、なのですか？

「……だから……死ぬ前に、味噌汁が、飲みたい」

私の頭を撫でながら、なる主は静かに呟きました。

「わ、わがりまじだ！」

まがぜでください！」

鼻水を垂れ流しながら、私は声を上げます。

必ずや、最高の味噌汁を作って見せましょう！

#####

なる主に出会ったのは、今日みたいに静かな雨の降る日のことでした。

栄養失調で死にそうな私に。

長い間まともな食事を摂っていなかった私に。

なる主が食べさせてくれたものが……『みそしる』でした。

磯臭い『かつおぶし』と『こんぶ』をベースに。

まともな味のしない『とうふ』と。

海のゴミと言われる『わかめ』とか言う海草を具材にした。

ウンチみたいな色のスープ。

今の私が食べたなら、きつと『二つの意味で、クソ不味い！』と言うでしょう。

でも、そのときの私にとって。

何日も食事がとれず、久しぶりに出会った、心のこもった、そのスープは。

……世界中の、どんな料理よりも、美味しい物だったのです。

なる主が雨に濡れないように、辺りに雨避けの魔方阵を展開すると、私は大急ぎで『みそしる』を作ります。

マジックボックスから鍋と『こんぶ』を取り出して、水魔法と弱い火魔法で静かに熱を加えていきます。

沸騰直前に『こんぶ』を取り出して、沸騰したら今度は『かつおぶし』を適量加えます。

『かつおぶし』が全部沈んだら、一旦火を止めて、灰汁を取って、再沸騰させて……。

気持ちが悪くなるのを我慢しながら丁寧に調理をこなしていく私。だっただって。

これがなる主の、最期に食べる料理になるのですから……!!

振り返ると、なる主はすっかり血の気の引いた顔をしていました。

脇腹からは、相変わらずじわじわと出血が続いています。

「……!!」

今すぐに走り寄って、泣き付きたい!

そんな気持ちを抑えるように、ぐっ、と唇を噛み締めて調理に戻ります。

『かつおぶし』を濾し取ったら、今度は賽の目に切った『とうふ』と、水気を切った『わかめ』を投入して、しばらく沸騰させます。

具材に火が通ったら、火を止めて、煮たたせないように注意しながら、『みそ』を溶かし込んでいきます。

「……おかあさん……今日は味噌汁だね……」

後ろから、ぼんやりとした、だけど幸せそうな、なる主の声が聞こえてきました。

もう、多分意識も朦朧としているのでしょう。

『みそしる』の匂いと『みそ』を溶く音で、昔、母親に『みそしる』を作ってもらった記憶を思い出しているのでしょうか。

ここにきて、私は気付きました。

食事は、記憶と結び付いている。

そこには、美味しいも不味いもなくって。

幸せか、幸せじゃないかがあるだけなんです。

この『みそしる』も。

『たまごごはん』も、『おにぎり』も、『おすし』だって。

あんなに美味しくないと思って料理を食べながら、それでも私はやっぱり幸せだったって。

同じ料理を出されたら、きつと文句を言いながら、私はまた「美味しく、食べきるだろうって。」

今更になって、そんな、当たり前のことには気がきました。

私は涙が入らないように『にえばな』をお椀によそうと、大急ぎでなる主の元へ持っていくます。

「なる主、なる主！」

『みそしる』、出来ましたよ！

自信作です！

なる主に美味しく食べてもらえるように、一生懸命研究したんですよ？

ほら、いい匂いでしょ？」

なる主は、うつすらと目を開けてはいるものの。

私の声は、聞こえていないようでした。

「……失礼します！」

ご免なさい、汚いって、言われるかもしれないけど。

最後の最期に、なる主に『みそしる』を飲んでほしい！

私は口の中に『みそしる』を含むと。

そのままなる主の口許に、それを持っていきました。

優しい雨の音が響きます。

なる主の喉が、こく、こく、と動くのが分かりました。

「……あ……ああ………奴隷………ちゃん？」

「……お味噌汁………作って………くれた………んだ………」

「……!!」

は、はい、なる主！

なる主の大好きな『かつおぶし』と『こんぶ』で『おだし』を取った、自信作ですよ

！

「……うん………とつても………おいしい………」

「なる主………なる主………！」

「………」

「待つて、待つて、ほら、おかわりもあるんですよ？」

「………」

「まだ飲みたいですよね？」

「………」

「待つて、待つて、目を、目を開けてくださいいいい！」

ダメです、ダメです！

なんで、なんで？

もう、こんなに、唇が冷たい！

いやだ、いやだ、いかないで！！

「……おいしい……なあ……」

「……なる主！！」

「……おいしいなあ……できれば……」

……これからも……ずっと……ずうつと……

……どれいちゃんのおみそしるが……のみたかった……なあ……」

「……何ですか、そんなことくらい、お安いご用ですよ！

これからも、ずっと、ずうつと、作ってあげます！

……誓っても良いです！

だから、だから、ずっと、ずうつと、いつじよにいでくださいいいいい……！！」

これは、たぶん、辺境の村『ニホン』での、そういう誓い、なのでしよう。

なんて遠回しな言い種。

でも、良いですよ、私も誓いますよ。

だからお願いです、神さま、仏さま、いえ、もう、誰でも良いんです……!!
この人を、助けて!

私の誓いに、なる主は少しだけ笑って。

そして、ああ。

そして、光の粒子がなる主の周りを取り囲んで……。

#####

「おお ゆうしゃよ!

しんでしまうとは なさけない!」

何やら嘆き悲しんでいる王様の前で、なる主と私は立ち尽くしていました。

「……？」

……??

………
「??????」

え？

え？

え？

わ、わ、訳がわかりません。

「な、な、なる主……こ、こ、これは、い、い、一体??」

同じく首を傾げていたなる主ですが。

しばらくして、「ああ」と手を打ちました。

「そういえば、勇者には、『死に戻り』のスキルがあつたんだつた。全然死ななかつたから、すっかり忘れてた」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……はあ？」

「……ゴメンね？」

私は少しの間、眉間を押さええます。

ちよつと、これは、ほら、いくらなんでも。

困惑する思考の中で。

だけど、歡喜の心を表現せずにはおられず。

なる主に、私の喜びが伝わらないように。

……私は、絶叫したのでした。

「誓った私が、バカでした……!!」

私の絶叫は王国を越えて。

多分、遠い遠い辺境の村にも、響き渡るのです。

というわけで。

これは私こと、『奴隷ちゃん』と。

最高で、最低の、ご主人様、『なる主』との。

どうでも良い日常の、ものがたり。